日本の近代思想の形成過程 その一
一東洋対西洋観を中心としてー

河原美耶子
(日本大学)

はじめに

明治維新は、日本に全く新しい政治、経済、教育、社会上の諸制度をもたらした。どの分野もそこでおこなわれた転換は大きなもので、それぞれが近代日本の進路を決定づける事業であった。このような形に現われる変化の他に、思想の転換も、また果たされなければならなかった。その意義は、政治制度、教育制度の変革や、その他多くの変化に応じても一層基本的なものであったと考える。とりわけ時代が転換して、未知の将来に向けて進む場合に、自己の思想的根拠を確かめることが必要となる。

知識は伝達され、技術は導入される。しかし、自らの人格と生活は自らが、自主的に創造する以外にない。それは日本の近代化にとっても、民主化にとっても動かし難しい基本的条件である。思想を単に知識としてではなく、人格と生活に根ざしたものとして考えていくこと、このことが少なくとも東洋思想に一貫する要求であったと考える。本論では、この視点で日本近代思想の形成過程を考察するものである。

１．東洋対西洋観

幕末、維新の頃に「東洋」なる観念が成立したといえるが、「東洋」という言葉が思想史的な意義を帯びてあらわれるのは、そこに文化的な連帯性があると考えられはじめているからである。それは、所謂「西洋」は一体的な文化圏をなしていると考えられ、それに対して先ず儒教に基づく連帯性によって日本と中国が、さらに仏教の観点からすればインドを加えて、ここに一体的な文化圏を想定する「東洋」なる観念が構成された。したがって、「東洋」の観念成立は、対西欧との接触にもとづいているといえよう。

この点をもっとも端的に示しているのが、佐久間象山の詩の形で述べられた次の一句である。「東洋道德西洋芸。匡廼相依り周模を宛す。大地の周圍一万里。還ら亇丸を欠き得べしや無しや。①）この全体をみれば、象山が「東洋」と「西洋」を対立させ、西洋の「芸」（科学技術）に対し
て、東洋の道徳的優位性を誇示しようとしたのでないことは明らかである。詩の第二行、第三行は、世界の有機的体性について述べている。第四行にいたっては鎮国制度への批判となっている。彼にとって「開国」日本は、一体的な世界のなかの不可分の一部として位置づけられたのである。先にあげた句に示されるように、はっきりと「西洋」に対するものとして、「東洋」という表現がとられており、それは、開国論者としての佐久間象山の到達した究極の世界認識であり、当時において、もっとも進んだ世界認識であった。

東洋と西洋を相対するものとしてとらえ、その総合として世界を考える認識方法は、その後、日本人の世界認識の基本線となっていた。現在われわれの有している世界認識の水準から、このような象山に観られる見解を批判するのは極めて容易であろう。しきしだれも象山の見解が、当時もっとも進んだ水準にまで達していたことに変わりはない。長きにわたる鎮国制と熾烈な攘夷論者を前にして、「須欠得半隔離」という世界を不可分離的な、有機的連絡としてとらえることは、思想的に、攘夷と鎮国からの完全な離脱を意味しているからである。このことは、開国という大きな歴史的転換に対処しようとする際の精神的自己規定であり、開国が外圧による受動的なものと考えられただけに、それを自主的なものに転化しようとする際の精神的根拠であった。

象山は、はじめ儒学、特に朱子学を修めたが、彼の朱子学の理解は合理主義的解釈を徹底させていている点に大きな特色がある。彼は朱子学を「究理の学」とみなし、天地の間に現在する「実理」の解明を最大の課題とした。象山の朱子学の理解は、それを聖賢の教えとしてよりは、究理の学としてとらえようとするものであった。

「当今の世に於て五世界に涉り、其あらるる学芸物理を窮め可レ申事、本より朱子の本意たらるべく候。」2)

このように、朱子学は陽明学にまさる合理性の故に承認され、その「理」は、万学に通ずるものとして理解された。

1841（天保十二）年、藩主真田幸貫は老中となり、海防摂老中となるが、象山は幸貫の命により海外事情を研究し、さらに江戸相営に洋式算術を学び、1844（弘化元）年頃から蘭学の研究に進んだ。象山は「詳証術（数学）は万学の基本なり」3) として、あらゆる学問に合理的基礎を与えるものとして数学の研究を重視した。洋学者としての佐久間象山が、思想家としても同時的に優れた存在であった理由の一つとして、その儒教的教養と洋学上の知識が無理なく、有機的に結合されている点である。

「当今の世に出で善く大学を読み候者は、必ず西洋の学を兼申すべき事、有無之論に及ばざる義。」4)と儒学と洋学との連携を強調し、洋学に対しても単に成績を受容するというだけでなく、創造的な検討の態度を示している。洋学は単に出来あいの技術学でないこと、またそれに止まるべきでないこと、重要のものは理論的探求であること、などを深く洞察していた。さらに門弟への期待もまたここに懸っていたのである。象山は、門弟達へ多数の書簡を与えている。そのなかで、彼が門人西村茂樹に与えた書簡をあげる。

— 17 —
日本近代思想の形成過程 その一

「抑 し観術は末なり，洋学は本なり，吾子今より宜しく洋学に従事すべし，余が如きは為三十年にして始めて蘭学を学ぶ，吾子の如き余に比して年尚弱し，須らく奮発激励して共大成を期すべきなり。」

これらの学問に対する認識や洞見は，近代思想に通ずるものである。

象山の世界認識については，すでに「東洋道德西洋芸」について述べてきたが，この詩に補足する見解は「省録」にもみられる。象山は「君主五つの楽あり」として，その第四，第五の楽しみについて，次のように述べている。

「西人者が理窟を啓きし後に生れて，古の聖賢が未だ謡で識らずとし所の理を知るは，四の楽なり。東洋の道徳と，西洋の芸術と，精粗多さず，表裏兼ね読ね，因りて以て民物を渦し，国恩に報ずるは，五の楽なり。」

ここに西洋の学術に対する深い尊敬の意が伺われる。東洋と西洋は道徳的に互に認めあい，知識，技術の交流をはかるべきものであった。

江戸時代の日本は1630年代（寛永年間）に，徳川家光が数度の布告により外国人の日本来航，日本海外渡航を禁止して以降，長崎へ来るオランダ船，中国船を例外とて，世界に対してほぼ完全に国を鎖していた。この鎖国令は一応，1854（安政元）年に幕府が日米和親条約を結ぶまで維持された。このことは，当然に，江戸時代の日本人の世界認識をも制約することとなった。鎖国制度下の日本人の世界認識は，世界に対する日本という態度であり，同時に，幕府が権力をもって制圧するものでもあった。したがって，江戸期の水が世界につながっているという説を述べた林子平の「海国兵談」（1792年）が発行を禁じられ，著者が生涯禁錮の刑に処せられたのも，すべての人は「鎖国」的見識のなかに安住していたことを示している。

幕末に主流をなしていた主張は所謂攘夷論である。それは激しく日本に近づく夷人，あるいは外国船の打ち払えを主張し，鎖国制度の存在を唱え，幕府の開港政策を非難した。しかし時代の推移は攘夷論者の主張にもかかわらず，最初の日米和親条約はやがて日米修好通商条約（1858年＝安政五年）となり，さらにイギリス，オランダ，フランスなど各国ともつぎつぎに同種の条約が結ばれるに至る。一方，攘夷の実行は1863（文久三）年の鹿児島における薩義戦争，翌64（元治元）年の長州藩と四国連合艦隊の下関における交戦となったが，この経験は過激な攘夷論者にも欧米列強の実力認識をさせるをえないかった。それ以後，攘夷論の主張の重心は倒幕論に移る。即ち，事実としての開国は認めたとしても，それは強制された思想転換であったといえよう。

幕府がアメリカ艦隊の力に押され開国したという歴史的実事にともなって開国の思想的意義は，日本の立場を世界のなかでとらえなおすことになる。それは世界に対する日本から，世界のなかの日本への転換であった。鎖国から開国への推移はこのような世界認識の上での転換を求めるものであった。

幕末の危機時代に，佐久間象山の思考の基準は，常に直面する実事と，それに対する合理性にかかっている。
「彼を知らず、己を知らざれば、戦ふごとに必ず敗るは、固よりなり。しかも彼を知り己を知るも、今時に在りては、未だ戦ふ言ふべからず。廣く彼の善くするところを善くして、しかも己の能くするところを畏はずして、然に後に始めて戦を言ふべし。」

ここで重要な点は、いかなる合理的思考も、最後に人間のこの主体的決定によって到達するということである。

象山の主な門弟をあげれば、吉田松陰、橋本左内、坂本竜馬、高杉晋作、勝海舟、加藤弘之、西村茂樹などの諸々たるべき人材が並ぶ。象山の影響力の大きさ、広さをうかがうことができる。彼等は、各々の立場と、分野で、変革の時代を、新しい未来を求めて闘った人びとであった。

象山といえども最初から開国論者であったわけではない。彼もはじめは、攘夷論者であった。それは、彼の次のような攘夷、鎮国の主張からうかがうことができる。

「堂々たる神武の本邦を以て、是迄久敷、御御絶御座候ひしイギリスに、此度の兵声を御懐れ、容易に交易の義を御免御座候と申候て、公儀の御耻辱此上べからず、(以下略)」

その理由も「唯利にのみ観く」、「元来道德仁義を弁へぬ夷狄」という、攘夷論全般に通ずる対外観念が根本をなしていた。このような夷狄観とともに、他方、攘夷論を支える柱となっているのは、祖法や先例を絶対観する封建的伝統主義である。象山は、1842（天保十三）年、藩主真田幸親へ「上書」として「海防八策」を上申した。それは兵備強化を中心としたもので、洋式を採用して砲台を修築し、大砲、軍艦を製造するというものであった。このような洋式兵備の採用を唱えているとはいえ、依然攘夷論的論調が基本となっている。しかし、洋式の採用といっても、当時、それは相当の障害、抵抗があったと思われる。すでに述べたように、一つは強固な「夷狄」観と他方、変化を怖れる「祖法」遵守の気風である。象山は「平常の事は平常の法に従ひ、非ッての際は非常の利を用ひ」るのが当然であると主張している。

1850（嘉永三年）年、老中阿部正弘へのオランダ語辞書刊行の許可を求める「上申書」に、象山は次のように述べている。「當今海寇備禦の策、其完全を期候には、世間広く彼の長短得失を知り、其状態を詳に侯様仕度義と奉候候。」「其所長所得を採用し、其短失の所に乗じ候事も自然出来可仕候。彼其長短得失を詳に申候には西洋の原書を広く読み候に若くは無御座、又従善宜翻訳書を多くし実用を助け候に、原書を読み候もの盛に無之候は難叶義と奉候候。」

このように象山は辞書の刊行を求めるが、ここにおいて「長短得失を知」るという採長補短の基準は、より広い適用範囲となっている。それは、近代化のための基準とみなされるもので、軍事的近代化もこのような全面的近代化の一環として以外には可能でない、ということである。さらに、「夷狄を駄るには、先づ夷情を知るに如くはなし。夷情を知るには、先づ夷語に通ずるに如くはなし。故に夷語に通ずることは、ただ彼を知るの梯級たるのみならず、またこれ彼を取るの先務なり」であった。

この認識は、また象山をして攘夷論的主張から開国論の主張へと導くことになる。また、象山の攘夷論からの脱却に由来することによって、さらに根本的なものとなる。象山の思想が、やがて攘
日本近代思想の形成過程 その一

夷論から離れていく過程には、蘭学、洋式兵学の習得があり、欧米諸国の軍事力に対する合理的な評価があったが、根本的には、攘夷論を成立させる二つの柱、即ち、夷狄観と封建的伝統主義からの脱却であった。

幕末に、攘夷論の最盛期に、象山のような視点に立ち、積極的な開国思想に到達した人物は極めてわずかなものであった。象山の門弟、橋本左内もその例外的人物の一人であった。1857（安政四）年、江戸城において将軍に謁したハリスの勇気を讃えている。

「只兩人の天て仏々大都府へ聴りいで侯は、その気象勇邁想いやられ、外国人ながら感服の至（中略）之をわが神州聖明の域に生長し、泥々滄々婦人女子にも及ばざる人物に比して侯へば、そのあい拒る幾何か。これに感興せずして徒に彼を夷視仕り候は、何等の辻人俗客か、ともに語る可からざる者と存候」。

この見解は、左内においても西洋人に対する夷狄観からの脱却を示している。象山にしても、左内にしても道徳的優越性を誇示しようとしたのでないことは明らかである。

現在と当時とで、「道徳」という表現は同じであっても、その意味するところには大きな関りがあると考えられる。それは儒学的思考に伴う「德化」という考え方である。「道徳」という観念には、儒学的思考から、一面で徳を以て化する「德化」の観念が含まれており、これは今日、われわれの道徳観とは相違するものである。象山が、先に述べた「東洋道徳」に、開国に対する主体的姿勢のよりどころを求めたのも、このような「道徳観」が前提となっている。さらに、「德化」とは現象面に成り立つものでなく、理想的世界に行われるものである。象山が、東洋の名の下に描いたものはユートピア像であった。佐久間象山によって提出された「東洋」と「西洋」の問題性は、そのまま明治時代に引き継がれることになる。

明治初期においてもっとも明瞭な形で取り上げているのは、北村透谷である。彼は次のように「東洋」と「西洋」の問題性について述べている。

「明治の思想は極めて複雑なり、而して今日まで其面上にベールを被みて、恰もベルシャの美人が外行する時のごとくなりしは、国民固有の思想が、西洋の文物を圧れさせられつつありたらければなるべし。（中略）西洋の文物をて敢て退るべきにあらず。東洋の国体をて、敢て頑守するを用ひず。然れども国民の声は姫僕の声ならしむべからず、固有の思想は傲慢に失するとも、卑屈に安んぜしむべからず。」

このように、象山から透谷まで、「東洋」の観念にもらった問題の本質は一貫している。象山が、東洋の観念にかけたものは、外からの開国に対する、内からの自由的開国のための精神的抵抗であった。透谷の求めたものは、欧化主義に対する自律的、国民主体の近代化のための抵抗であった。

２．西欧化と日本人観

鎖国制よりの脱却、開国による近代化とは、国民的な規模での全面的な西欧との接触を意味する。
欧米との全面的接触にあたって、日本人が最初に示した心理的反応は、すでに述べてきたように、攘夷論となってあらわれるが、明治初年にになると、ようやく一定の国民的な自己認識をうるところにまで至るようになる。この認識とは、どのようなものであったか。1875（明治八）年、『明六雑誌』に掲載された「人ノ性質ヲ改造スル説」と題する、中村正直の論文の一節を観ることにする。

「戊辰以後＝人ヲハレクル器物ハ昔時ヨリ善キ形状ナルベクレデモ人ノ矢張ノ人ノ民リ、奴隷根情ノ民リ、下ニ騒リ上ニ婦ノ民リ、無学文盲ノ人ノ民リ、酒色ヲ好ム人ノ民リ、読みヲ好マザル人ノ民リ、天理ヲ知ラズ職分ヲ省リザル人ノ民リ、智識ヲ浅短局量縮小ナル人ノ民リ、劣者ヲ厭と艱難ヲ帯ワザル人ノ民リ、私智ヲ狭ミ小慧ヲ行フ人ノ民リ、勉強忍耐ノ性ナキ人ノ民リ、浮薄軽薄胸中主ナキ人ノ民リ、自立ノ志ヲキシテ人ニ依頼スルヲ好ム人ノ民リ、観察思想ノ性乏シキ人ノ民リ、金銭ヲ用フルヲ知ラズル人ノ民リ、約諾ヲ破リ信義ヲ重ンゼル人ノ民リ、友愛ノ情ヲ薄ク合同ガ致シガタキ人ノ民リ、新発明ノ事ヲ務メタル人ノ民リ。」

ここにいわれている「人民」とは、いうまでもなく、日本国民のことである。「奴隷根情ノ人民」「無学文盲ノ人民」「云々紅々かえし述べているが、この「人民」の中に、筆者中村正直も含まれているとは考えていない。当時の啓蒙思想に特有の、有識者の知識なき「人民」にたいする階級的差別観がある。即ち、「民」とは「中人以下」の概念である。中村正直は、自分を「改造」されるべき人民の中に含めて述べているのではない。彼が、人民を改造されるべきものとみなして、結論として次のように示している。「明治以来ノ民ノ性質ヲ倫理ヲ改メテ、欧亜諸国ノ人民ラノ資質ヲ見 Что於て、同化ヲ考エテ、自らノ同化ノ努力ヲ更ニ急メダル」と。ヨーロッパと同じになること、即ち、西欧との同化ということであって、これが改造の方向である。このように劣等な日本人から、自分自身を区別すること、自分だけがこの劣等民族に所属することから解放されているとの精神的自己認識を得るには、自分を西欧人に似せれば良い。人びとは文明開化によって、日本もまた西欧と同化するに至るであろうと、ひたすら近代化に邁進した。このように無条件に近代化を西欧化と同視する所謂近代主義の精神傾向は、開化を理想としてうまれたが、究極において、「西欧」との同化を志向するものであったから、その重要な特性として、「速さ」をあげることができる。明治以来、日本人がいかに海外の流行に敏敏であり、それを受け入れるのに速やかであったか。政治、経済、教育等あらゆる分野に広汎に、日本の急速な近代化は、機敏に、大胆に新しい傾向を探索に入れるその能力に依存していた。同時にそれは賛えられるべき徳性でもあった。

他方で、日本の文化の中に、あらゆる東洋諸文化の精随が融合され、保存されているという考えがある。それは、日本文化は東洋文化を代表して、「西欧」の近代文明と向き合うことができるという思想である。さらに、それは近代日本の抱いた一つの誇りであり、自負でもあった。この観念を表明する著作は、明治以降に数多く見出すことができる。例えば、内村鑑三は次のように述べている。

「思ふに、明治維新は、二つの異なる文化の形式を代表する二つの民族が、相互に名目を損はざる立派な交渉をはすに至る——「前望的西洋」がその無秩序な進歩を抑制せられ、「回顧的
日本近代思想の形成過程 その一

東洋」がその情眠より覚醒せしめられた——世界歴史の一断層点としての意義を有するものである。その時以来、西洋人も東洋人もなく、ただ万人が人道と正義とに於て一たるべきであった。日本の覚醒させる以前は、世界の一方は他の一方に背を向けていた。しかし日本によって、また日本を通じて、両者は面々相対するに至った。日本の解決すべきもの、また現に解決しつつあるものは、ヨーロッパとアジアとの正しき関係という問題である。

ここに述べられた論旨の大綱を観れば、「東洋」の観念が、「西洋」との接触にもとづいていることがわかる。近代日本は、ここに自己に課された歴史的使命を見出したのであった。それは、東洋と西洋を相対するものとしてとらえ、その総合として世界を考える認識方法の基本となっていった。

３．西周の近代思想

西周の思想の業績として第一に挙げられるのは、philosophyを「哲学」と訳したのを始めとして、「主観」、「客観」、「観念」、「理性」、「先天」、「後天」、「実体」、「帰納」、「演繹」など、今日でも用いられている哲学的用語を創案したことである。

このような点から推しても、日本近代文化の形成者として、西周の業績の大綱は大きい。明治初期に、新たな学問を開いたが、それのみでなく儒学、国学の素養も深く、西洋百科の学問と西洋思想とを総合して、独自の学問体系の樹立を試みた。

西周の思想の業績の主な形成については、1874（明治七）年から翌75年に出された「百一新論」、「教門論」、「星文三宝説」など一連の論文にみることができる。西周は、「百一新論」において、封建的、宗教的な政教一致の観念を批判し、法と政教の分離を説いている。次に、「教門論」では、宗教一致を批判し、政治と宗教の分離を主張する。これらの論旨によって、封建的政治理論に在る不合理の要素を清算される。さらに「星文三宝説」は、西周の近代的社會道徳思想を積極的に展開したものであり、この三論文は、以上述べたように一貫した論理を追求する三部作と考えられる。

政治と道徳、政治と宗教の分離に基本的な論拠を与えたものは、物理と心理との区別である。西周は、オーギュスト・コントより示唆を受け、同じ「理」であっても物理と心理とは差別のあること、特にこの両者の間にいかなる関係を求めるかについては、その思索の中心主题をなしていた。「百一新論」に、その差別が詳細に述べられている。

「平常唯理がアル事トノミ心得テ其区別ヲモ知ラズ、物理ト心理トヲ混同シテト果々ハ人間ノ心カデ天然ヲ物理ノ上カヲ変化セラレル様ニ心得ルハ大ナル誤デハゴザルマイカ」

また、「教門論」にも宋学における「天理」の概念が、この混同として批判されている。

「抑ノ儒者ノ道トト申ス者ハ如何様ニモ政教ノ考ガ混雑シテゴザルガ先其病ヲアサバ大学二術身

斎家治国平天下トテ、術身治人ノ道ヲツニ言タ所ヲ後儒ガ見損ツテ、己サヘ術レバ人ハ治メラ

ルト誠意正心ガ出来ラト天下ハ平カニナルト心得テ、何デモ格物致知識意正心ト云フカラ、ソレ
教育学雑誌第27号(1993)

サヘ出来レパ治国平天下ノ事業ハ別ニ学問モセズ其利害得失ヲ講明セズトモ自然ニ出来ラル様ニ心得テ、禅宗ノ坊主ガ坐禅ヲスル様ナ事ヲ政ヲスルモノトフハ痛ク取リ損フタレデガザル」。このように彼は政教一致の儒教論理を批判し、「徳礼仏化」と「政刑ノ治」は区別されて、「天下国家ヲ治ムル上デハ、政刑ノ治ガ正道デガザツテ、徳礼仏化ト云フハ孔孟ノ夢」となる。この分離論の理論は明確であるが、その合意するところは広氾である。

「修身」という自己目的、自己充足的な実体概念からの解放は、道德をも、政治をも他者との関係において成り立つ機能的的概念に転回させる。西周は、「理」の概念にも「事物ヲナガラ各々其性ヲ有スル者ノ際ニ成立スル関係ニシテ、一物一物ノ中ニ住スル者ニ非ルナリ」と、その実体化を批判している。ここから社会道徳的理念が展開されてくる。

政治においても実体的な「名分」は機能的な「実理」に代えられる。即ち、「名分ナドハ虚器デ人君ノ天職ヲ奉スニ万フハ天下ノ人民ト好悪ヲ同ウシテ正直平公平ヲ以テ政ヲナシ、善徳ヲ保テ其社会ニ化スルニ在ル事デガザル。是ガ其實理ヲ勤メルノデ」と述べている。

「教門論」における政治、宗教分離の論理も、「政府ノ苟モカノ神教政治ノ体ヲ存スル者ハ宜シク早々其政教相連絡スルノ脈ヲ絶テ、教門ヲ害ヲシテ政治ヲ害ヲナサラシムルニ在ルノミ」と論じた。このようにして、封建的世界観において融合混同されていた政治、宗教、道徳は各々独立の分野を得て、自律性を保持することになる。

近代的社会道徳の建設をめざす「人世三宝説」では、次の二点が前提として要求される。一方では、自己完結的な封建道徳の諸道目に対して、社会的道徳——社会道徳学——を樹てることであり、他方面では、道徳との分離が示すように、道徳の側面からも政治のための道目とは異なった社会的道徳が要求されるということである。

西周のいう三宝とは、「第一に健康、第二に智識、第三に富有」の三つを指す。これが「一般福祉」の下に統合され、「温存、敬、謙、撙、寡欲、無欲」などの道目とは、明らかに区別されている。さらにこのような三宝は「腕力張り、知識敏捷を備え今欲スル、博徳転歩ノ類ノ哲学者」として、この三眼目こそが「最大康福ノ基本」であり、これを全うすることが「天授ノ暴険セザル」ことであり、「此道学ニテハ金ヲ欲スルコトモ道徳ノ一分ヲ忘フルナリ」と述べている。

他方で、この社会道徳は、政治的要求するところとは独立し、むしろそれに対し、その基礎たるべき地位を占めるべきであると。「哲理ノ眼目ヲ備レハ政府未未タリタハノ前ニ既ニ人間社会ニ生性ニ生當然ニ道ハ備ラサルヲ得ス（中略）今ソレ文明諸国ニ在ハ社会ニ生性ニ道ハ備ラサルヲ得ス（中略）所謂政府ナル者ハ言ハハ倫理ヲ繋かし括ヲホルノ米トヲナサルヲ為スヘシ」。「国王ノ尊、宰相大臣ノ貴、豪商農ノ益」ニ「社会ニヨリハ之ヲ願ハレ汝彼亦此ト各々社会ニ於テタルニ過キス」と、こうして近代社会哲学の基本的範疇たる政府または国家に対する「社会」の概念が位置づけられた。

西周の「人世三宝説」は、彼自らも述べているが、その大綱をJ．S．ミルの説によっている。ミル自人が功利主義と理想主義の中間に立って、その思想の性格が複雑である。したがって、明治
日本近代思想の形成過程  その一

初年のミルの哲学流行の時代に、それを真に理解し消化することは甚だ困難であった。それ故、本来思想に要求されるような、一貫した深い論理を追うところまでに至らず、もとすると都合の良い部分のみが移植され、利用されることになる。恐らく、西周は、当時思想界のこの弊害を最も強く感じていたと思われる。彼が一貫して「理」を追求し、論理を適用したのも、日本近代化の道路を示そうとする抱負からであったって、彼の「人世三宝説」は、市民社会の論理を把握している点で、大きな業績であったと考える。

西周の思想の根本的志向は、他の啓蒙思想家等と同様に、日本近代化の合理的諸基準を探求することであった。すでに述べてきたように、彼は思想の中心に「理」の探求を置いている。すべての諸事象を「理」に還元して把握すること、諸学を「理」の立場において秩序づけること、さらにこのような傾向は、西周の生涯をかけて思想活動に一貫している。彼は、早くから、幕末の頃より、西洋哲学に関心を抱き、かくとても特に論理学の研究に力を入れた。そしてすべての彼の論稿の基礎に論理的な基準を据えていた。「尚白簡記」は、早い時期に書かれた彼の論文であるが、そのなかで、和漢洋各々の思想において用いられている「理」の意味が明解されている。その文の冒頭に次のように述べている。

「凡そ百科の学術に於ては、統一の観あること緊要たる可し。学術上に於て統一の観立てば、人間の事件も総じき、社会の秩序も自ら定まるに至るべし。誠に人間各自の事業も総じき、社会の秩序も定まり、苟も紛乱する事無れば、其結果は即康寧なる可し。」 として、その「理」の追求が一方では宋学から、他方で自然科学にまで及んでいる。文中で、「統一の観」とは、西周にとっては「理」の探求であり、彼はその探求が「家国天下的富強」や「福祉」に役立つとしている。また、彼の晩年に、1889（明治二十二）年の論稿である「理ノ字ノ説」にも、同様の論旨で次のように述べている。「凡ケ万々万々萬々物事相相相相相相サペ、其際ニ理生ゼラルコトモシ、」 ここにおいても、自然と人間社会のすべての事象の間に発見する「理」の存在すること、また、学問の課題はその探求にあるという見解が貫徹しており、このように彼の思想形成過程を理解することができる。

西周にとって「理」の究明は、合理主義的な立場からする封建批判の根幹を示そうとするものであった。例えば、1866（慶応二）年、西周が幕府直参として開成所教授職となったことに対して、これを旧主亀井茲監に非難された時に、友人宛の書簡で次のように述べている。「尼父春秋以来、君臣之義とか申すのも支那日本之人心に似着し、徳をも洗も除くべからざる一大瘤と相成り候（以下略）」 と。このように西周は、封建的身分制度や封建的イデオロジーに対して否定的見解を持っていが、それはやがて西洋哲学についての知識の深化と共に、合理的な封建批判へと展開することとなる。前述した「人生三宝説」には、彼の倫理思想を体系的に示しているが、さらに封建遺従から近代的社会道徳への価値転換が集約されている。彼における「理」の探求は、日本における近代社会建設のための方向を、即ち、文明開化の合理的進路を解明しようとするところであった。

文明開化は急速に西洋文化の流入とともに行われたが、ここから西洋における近代科学、近代哲学を移植するための原理的探求が、次の課題となる。そのことは、一方で学問を封建的技術学から
解放し、他方で、西洋諸学が達した成果のみに着目し、結論的に部分のみを早急に導入しようとす
る受容——模倣——の態度を斥けて、より創造的な摂取が求められる。社会の進歩を知識や学術か
らとらえて、それによって社会的進歩を促すという思考は、啓蒙思想の基本的特徴の一つと考える
が、西周の思想にも明らかに観ることができる。

「凡そ我か智識ヲ開カムト欲セハ、凡百ノ事理我生レナカラニシテヲ通スルヲ能ハス。（中略）是
学問ノ道起ヲサルヲ得スシテ、文化ノ体位ヲサルヲ得ヲスノ所ナリ」23)

さらに、彼が「哲学関係」において、学と術との区別に留意しているが、一つには、封建的技術学
の立場からする学術闘への批判的見解を含むものと考えられる。その後で、学（science）と術
（art）とを区別しており、学をさらに単純な学（pure science）と適用の学（applied science）に、
術を技術（mechanical art）と芸術（liberal art）に分けている。このように、学問の持つそれ自
体の価値と実用的観点からの価値との間に、確定的関係を立たることは、西周の大きな思想的課題
であったと考えられる。

同様に、西洋諸国への単なる「模倣」についても、それは近代的諸学の実質的推進を損なうもの
として当時の傾向をきびしく非難している。「唯模倣ヲ事トシテ、概観ヲ一貫ヲ理ヲ求ムルコト無ク、
言ハリ事ヲ論ジニ事ヲ行フモヲ哲学上ノ見解ヲキテハ、唯是優劣ヲタルノミ」24) である。この弊
を正す方法として、一つは実験であり、一つは「學問ノ淵源ヲ深ウスル」ことである。

「固ヨリ時勢ノ要ヲスルノ所ヲ耐ベ、急需ニ応ヒ、捷徑ヲ取ル等ノ事モ、今日免ル有ヲヲザル事ヲリ
ハ雖ドモ、總ヲ學問ヲ従事スルハハ、ナルタケ直接ニ当世ノ事ニ拘ハラストモ、各其科学ハ深
遠ナル理ヲ極メ、無用ノ事ヲ種スルノ理ヲ，理ヲ講明スルハ為ニハ徹底ノ見解ヲ要シ，特別ノ楽ヲ行
メテ人ヲ元ヲ誘スル如ク，（中略）又心理ヲ学術ニテモ、道理ヲ説キ、法律ヲ論ズルモ其本
源ハ人性ヲマデヲ戦リテ、其淵源ヲ究メタキ者ナリ」。25)

欧米諸学の具体的な成果を抽象的な「理」にまで達元して把握することは、単なる受容から学問の
創造的発展へと進むべきことを意味している。先に西周の著作「學問ハ淵源ヲ深クスルニ在ルノ論
」を観てきたが、その冒頭に、「余割日スペンツセル氏ノ理性ヲ論ミ感スル所アリ、今論述ヲ論述スル
ニ方リ、柳ヲ其本文ヲ大意ヲ講ツシ、次ニ余ヲ論述ニ及フヘシ」として、「ヘルベルト、スピエル、
プリンシプル、オフ、サイコロジー」26) を基にして論述を進めている。彼の主張するところは、
すでに述べてきたが、西周の趣意は次の点にある。「兎ヲ西洋ノ學術ト雖モ、亦無用ノ長物ヲルコ
トヲバレヲサルノ弊ヲ患ヘシ、然ヲ今此模倣ノ弊ヲ喚メト欲セハ、何ノ如カ道ヲ従事スヘキト
云フニ、余ヲ見ツル所ニハ唯ニ道ヲ過キス、其一実ヲ主トス、其一ハ學問ヲ淵源ヲ深ウスルナリ」。
「只管ニ欧州ノ事ヲミヲ主トシテ、本邦ノ利害ヲ得ヲ審カニシ、本邦ニ亜細亜東方ノ歴史、
人情、風俗ニ通シ、殊ニハ又自己ト経歴、體験ヲ主トスル事ナリ、此ノ如クヲサラハレ、学ヲノ
学術ヲタクハ生硬事實ニ切ヲナラス」27) であった。したがって、西周にとって、一見抽象的な「理」
の探求という課題も、少しも実践的目標から遊離したものではないかった。彼は、論理学をもって諸
学の基礎の学科であるとし、その研究に力を入れてきたが、そこには単なる西欧論理学の輸入、紹

— 25 —
日本近代思想の形成過程 その一

米にとどまらず、その研究成果をもって実践的課題に答えようとするものであった。その意図は、要約すれば、日本の合理的近代化の方向を志向しているといえるであろう。

西周が、論理学をもって諸学の基礎としめとしたことは、すでに述べてきたが、この例として、彼が1874（明治7）年十二月、「明六雑誌」に発表した「内地旅行」的論稿がある。西周は論理学による分析法を適用して、結論として「此帰納ノ方カラ見チモノ張詐スガ著イト云フ道理ヲ」と、外国人に国内旅行を許することを認めている。当時外国人の内地旅行や国内観光を認めるか否かは、政治的とも、外交政策上の大きな問題であった。

だが、西の賢成論に対して、福沢論吉は外国人の内地旅行の即時実施に反対論を述べている。福沢は、「明六雑誌」に、「内地旅行西先生ノ説ヲ駁ス28）の論文を掲げて反駁している。その根拠は、「国ノ独立ニ怪我アランコトヲ心配スル」点にあり、外国人国内旅行問題に対しては「今外国ノ交際ハ正シク今ノママニテ差支アルコトナシ」で、「時節ヲ待ツヲ外方便アラス」と結論している。福沢の反対は原則的反対でなく、「時節ヲ待ツ」という点にある。

このように、西周と福沢論吉の思想様式を対比することによって、一層日本近代化の構想とその特質を理解することができる。また、両啓蒙思想家の東洋対西洋観に含まれる問題の本質についても明らかになるであろう。したがって、西周と福沢論吉の近代思想についての比較研究は、稿をあらためて考察を試みたいと思う。

注
1）「詩釈」象山全集・上巻、尚文館、1913年 896頁
2）文久二年九月「幕府への上書」前掲巻、241頁
3）「省聴録」前掲巻、10頁
4）「文久二年上書」前掲巻、241〜242頁
5）「池翁西村茂樹伝」上巻、30頁
6）「省聴録」前掲巻、6頁

なお、丸山真男著「日本政治思想史研究」（東京大学出版・1965年、304頁）において、象山の「東洋道徳。西洋芸術」工の言葉は、「近代ヨーロッパ文化が封建末期の日本に浸透したとき透着せねばならなかった重大な限界」があると推論している。しかし彼は、象山についてのみえば、彼の思想形成を導いてきたものは、儒学的な思考様式であったとはいえ、その形成過程で、洋学を単なる技術学としてのみではなく、世界認識の実質的関心たる説をようとした志向の中にこそ、象山の思想的な意義があると考えるのである。

7）前掲巻、10頁
8）「天保十三年上書」象山全集・上巻、92頁
9）前掲巻、97〜98頁
10）前掲巻、98頁

— 26 —
教 育 学 雑 誌 第 27 号 (1993)

11）「嘉永三年 上書」前掲書，138 頁
12）「省督録」前掲書，14 頁
13）橋本左内「安政四年十月廿一日付書簡」，景岳全集・上巻，秋傍書房，1943 年 471 頁
14）北村透谷，文界時事（2），全集・第二巻，187 頁
15）中村直正「人民ノ性質ヲ改造スル説」，【明六雑誌】第三十号，明治文化全集・雑誌篇，日本評論社，1928 年 201 ～ 202 頁
16）内村鑑三「代表的日本人」，岩波，18 ～ 19 頁
17）「百一新論」西周全集，第一巻，宗右書房，1981 年 287 頁
18）前掲書，237 ～ 238 頁
19）「教門論」西周全集，495 頁
20）「尚白箋記」前掲書，165 頁
21）「理ノ字ノ説」前掲書，600 頁
22）森蘭外「西周伝」蘭外全集・第十四巻，299 頁
23）「人生三宝説」三，明治文化全集・雑誌篇，247 頁
24）「学問ハ淵深ヲ深クスルニ在ルノ論」西周全集・第一巻，哲学篇，571 頁
25）前掲書，572 頁
26）前掲書，568 頁
27）前掲書，571 ～ 572 頁
28）西周「内地旅行」明治文化全集・雑誌篇，166 ～ 169 頁
29）福沢諭吉「内地旅行西先生ノ説ヲ駁ス」前掲書，179 ～ 182 頁